

没後10年

# 詩人・茨木のり子の世界



撮影 谷川俊太郎

2016年 2017年  
12月17日～2月11日

徳島県立文学書道館

開館時間 9:30～17:00

月曜休館 \*ただし年末年始(12月28日～1月4日)は休館。  
1月9日(月・祝)は開館、10日(火)休館。

ばさばさに乾いてゆく心を  
ひとのせいにはするな  
みずから水やりを怠っておいて(略)

駄目なことの一切を  
時代のせいにはするな  
わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい  
自分で守れ  
ばかものよ

(「自分の感受性くらい」)

◆講演会「茨木のり子の詩」

2016年12月18日(日) 14:00～15:30

講師 高橋順子(詩人)

◆朗読会「茨木のり子を読む」

2017年1月15日(日) 14:00～15:00

朗読 岩瀬弥永子(元四国放送アナウンサー)

ギター演奏 平岡範彦

観覧料 一般 510円(400円)

高校・大学生 350円(280円)

小・中学生 250円(200円)

※( )内は20人以上の団体割引料金。小・中・高校生は土・日・祝日・冬休み期間中無料。65歳以上の方、各障がい者手帳をお持ちの方は半額。

主催 徳島県立文学書道館

後援 徳島新聞社 四国放送 NHK徳島放送局



茨木のり子の自作版画の年賀状。  
1971年、2人の甥に宛てたもの(宮崎治氏所蔵)

「わたしが一番きれいだったとき」  
「自分の感受性くらい」などの詩で、  
時代を生きる精神を鮮やかにうたい、  
今なお多くの人に愛され続ける  
詩人・茨木のり子(1926～2006年)。  
「現代詩の長女」と呼ばれ、凜として戦後の混沌とした時代をリードした茨木の清冽な作品世界と、女性として日々の暮らしを大切にした生き方を紹介します。



詩集『自分の感受性くらい』(1977年 花神社)



小学生の頃の茨木のり子

わたしが一番きれいだったとき  
街々はがらがら崩れていつて  
とんでもないところから  
青空なんかが見えたりした  
わたしが一番きれいだったとき  
まわりの人達が沢山死んだ  
工場で 海で 名もない島で  
わたしはおしゃれのきつかけを落してしまった

(「わたしが一番きれいだったとき」より)



20歳の頃の茨木のり子(山形県鶴岡市にて)



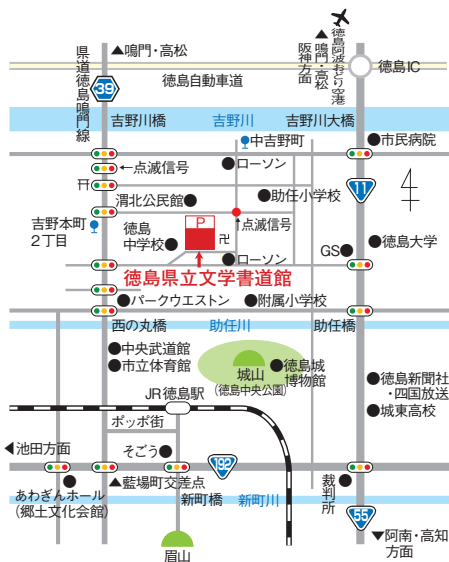
第42回読売文学賞を受賞した  
茨木のり子訳『韓国現代詩選』(1990年 花神社)



茨木のり子の死後発見された「Yの箱」。表に夫・安信のイニシャル「Y」が書かれ、中に夫への想いをつづった40篇の詩の原稿が収められていた



茨木のり子が川崎洋と2人で創刊した詩誌「権」の同人たち。左から谷川俊太郎、大岡信、川崎洋、水尾比呂志、茨木のり子、友竹辰(1956年)



◆講演会(12月18日)・朗読会(1月15日)申込方法 **要申込・入場無料**  
往復ハガキ(1人1枚)に講師名または出演者名、郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、年齢、電話番号を明記の上、当館まで郵送してください。  
当館1F受付でも申し込めます。

交通アクセス(JR徳島駅から)  
■徒歩 約15分  
JR徳島駅西側のポッポ街を抜けて右折。踏切と助任川を越えて、3つ目の信号交差点を右折して約300m。  
■バス  
徳島市営バス 7番乗り場「川内循環線(右回り)」に乗車。「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。  
徳島バス 2番乗り場「前川経由」に乗車。「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。  
■自動車 約5分  
国道192号線、藍場町交差点を北進。助任川を渡り、4つ目の信号を右折して約300m。  
当館北側に駐車場があります。